

関連資料

日本の母親への調査レポート

『育児不安と育児情報に関する子育て調査』
ダイジェスト版

情報教育研究所

山岡 テイ

はじめに

乳幼児をもつ保護者の育児生活に関する時系列調査研究を、全国・首都圏・海外で続けてきました。

毎回、アンケート用紙を読み進めていきますと、お一人ひとりからの子育てについてのメッセージをいただいているような気がしてきます。

育児の喜びや気がかりの回答内容には、その時代の社会や経済の問題が色濃く映し出されています。その貴重な声を多くの方々に届くように、報告書のダイジェスト版をまとめました。

このたびの調査には、お忙しい日々にもかかわらず、東京都・埼玉・神奈川・千葉県の保育所や幼稚園の保護者の方々と先生方に、ご協力ご参加をいただきました。

この場を借りまして、心からのお礼を申し上げます。

今回、ここに関連資料として掲載しました『育児不安と育児情報に関する子育て調査』ダイジェスト版は、『多文化子育て調査』に先だって実施したものです。この調査は、前章までの『多文化子育て調査』に関連して、日本の母親を対象にした第1次調査の役割を担っています。

育児期の母親が抱える心情は、民族や国籍を超えて共通することが多いと思われれます。したがって、日本の母親と多文化な保護者の共通点と差異を比較するために、『育児不安と育児情報に関する子育て調査』で用いた質問内容とほぼ同じ項目を、『多文化子育て調査』の後半部分でも用いました。また、第5章・第6章のコラムで紹介した中国本国での調査用紙も、同じ内容の質問紙を用いています。

両方の調査結果をお読みいただくことで、これらの報告書が、保育・教育現場や地域コミュニティで、すべての家族にとっての多文化理解と子育て支援の一助になることを願っています。

平成13年9月

情報教育研究所 山岡テイ

調査概要

1. 調査目的

本調査は、母親達の育児生活に関する意識や態度を規定する諸要因を検討し、しつけ・教育情報環境と育児不安の関連性の検証を行い、今後の育児情報や育児支援環境のあり方を考察することを目的とする。さらに、すべての親子と保育者にとって、地域や保育施設における多文化育児への理解を深める研究の第1次調査とする。

2. 調査内容

- 1) 子どもの発達、生活習慣やしつけに関する受けとめ方
- 2) 育児不安やしつけ・教育観に関する意識、夫や周囲の育児支援状況
- 3) 活用情報源と信頼情報源の判断理由、情報収集意識・行動
- 4) 母親自身の生育歴（子ども時代に親から受けた養育態度）
- 5) 基本的属性

3. 調査時期： 1999年7月～8月

4. 調査対象： 1歳から6歳児までの就園児をもつ母親

5. 調査地域： 東京都、埼玉県、神奈川県、千葉県

6. 調査方法： 園通しの郵送法・留め置き法 幼稚園9園、保育園11園

7. 配布数： 2,430通

8. 回収数： 1,723通 (70.9%) 有効集計数： 1,704通 (70.1%)

基本的属性

1. 子どもの属性

子どもの男女比は、男子 55.0%、女子は 45.0%であった(図8-1)。出生順位は、第1子 56.2%で、第2子以降の子どもは 43.8%であった(図8-2)。

子どもの年齢は、1歳児 3.6%、2歳児 4.5%、3歳児 20.5%、4歳児 31.2%、5歳児 31.4%、6歳児 8.8%であった(図8-3)。

就園施設及び学年別の比率は、保育園1歳児クラス 4.1%、保育園2歳児クラス 4.9%、保育園3歳児クラス 7.9%、保育園4歳児クラス 8.7%、保育園5歳児クラス 9.3%、幼稚園年少児クラス 18.3%、幼稚園年中児クラス 24.6%、幼稚園年長児クラス 22.1%で、保育園児は 34.9%、幼稚園児は 65.1%であった(図8-4)。

2. 保護者の属性

父母の年齢は、30代半ばが中心層で、母親の年齢の平均値は34.2歳、(中央値34.0歳、最頻値も同じく34.0歳で、標準偏差は4.4)、父親の年齢は平均値36.9歳、(中央値は37.0歳、

最頻値は36.0歳で、標準偏差は5.3)であった(図8-5)。

母親の就業状況は、専業主婦 55.0%、パートタイマー27.2%、常勤 17.7%であった(図8-6)。

母親の最終学歴は、中卒 4.4%、高卒 42.7%、短大卒 30.6%、大卒 20.8%、大学院卒 0.8%であった(図8-7)。

居住地域は、東京都 23.0%、東京都下 31.3%、埼玉県 16.7%、千葉県 7.2%、神奈川県 20.9%であった(図8-8)。

子どもの人数は、1人が 27.9%、2人がもつとも多く 52.9%、3人が 16.6%、4人以上は 2.6%であった(図8-9)。

調査対象者の就業状況属性を要約すると、母親は 25歳～44歳で 98.7%を占めており、パートタイマーを含めて 44.8%が働いていた。

総務庁統計局が1999年8月に行った労働力調査特別調査によると、0歳～6歳児をもつ25歳から44歳までの母親の就労率は、46.1%であった。本調査の母親達とおおむね近い数値であるといえよう。

図8-1 子どもの性別

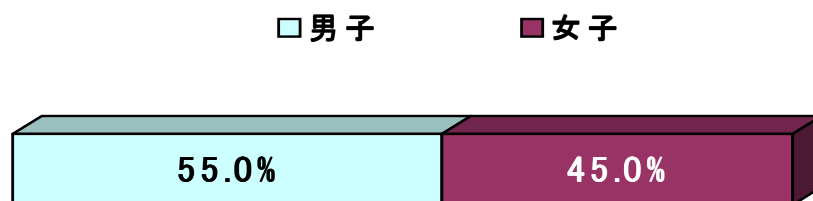


図8-2 子どもの出生順位

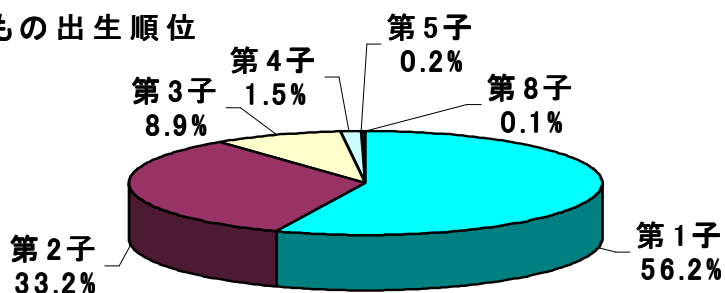


図8-3 子どもの年齢

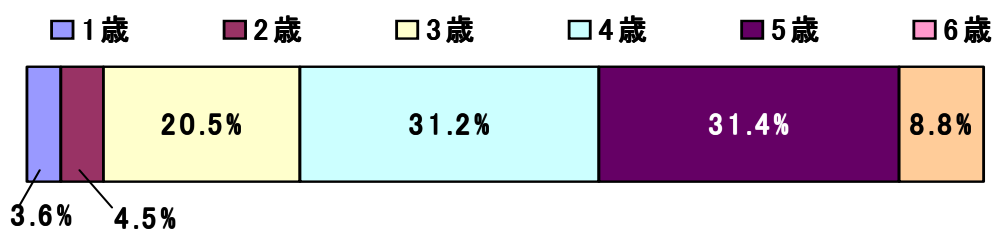
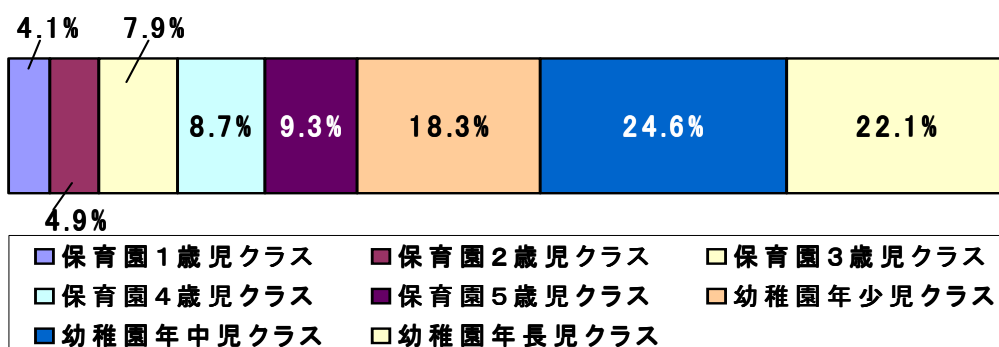
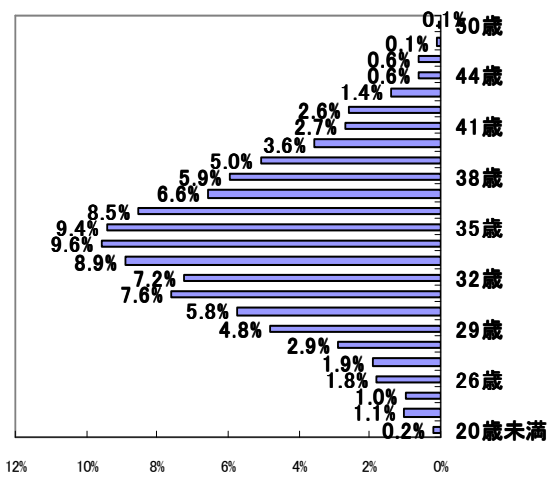


図8-4 就園施設と学年



N=1704

図8-5 父母の年齢（母親）



（父親）

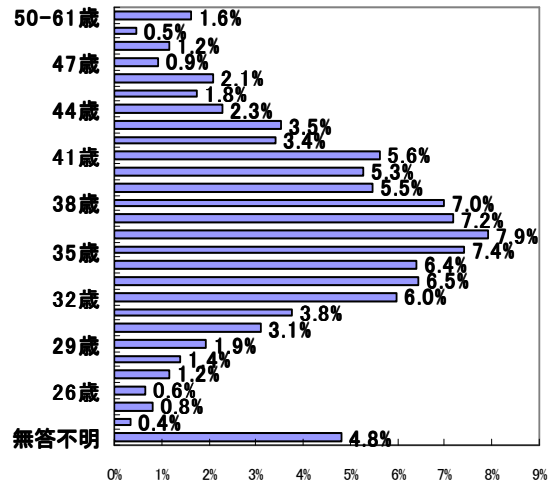


図8-6 母親の就労状況

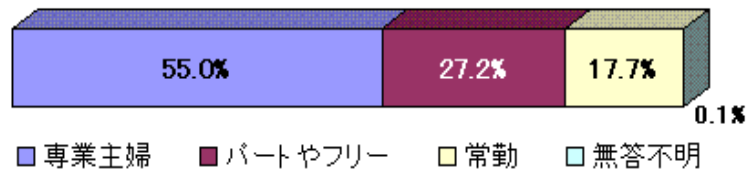


図8-7 母親の最終学歴

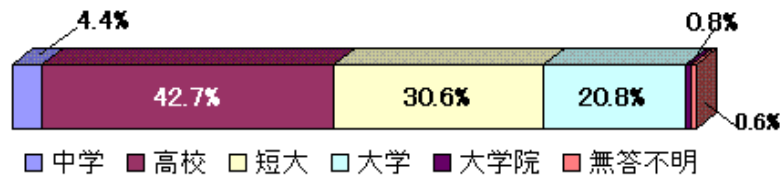
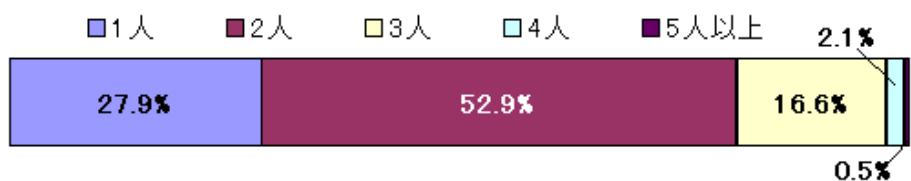


図8-8 居住地

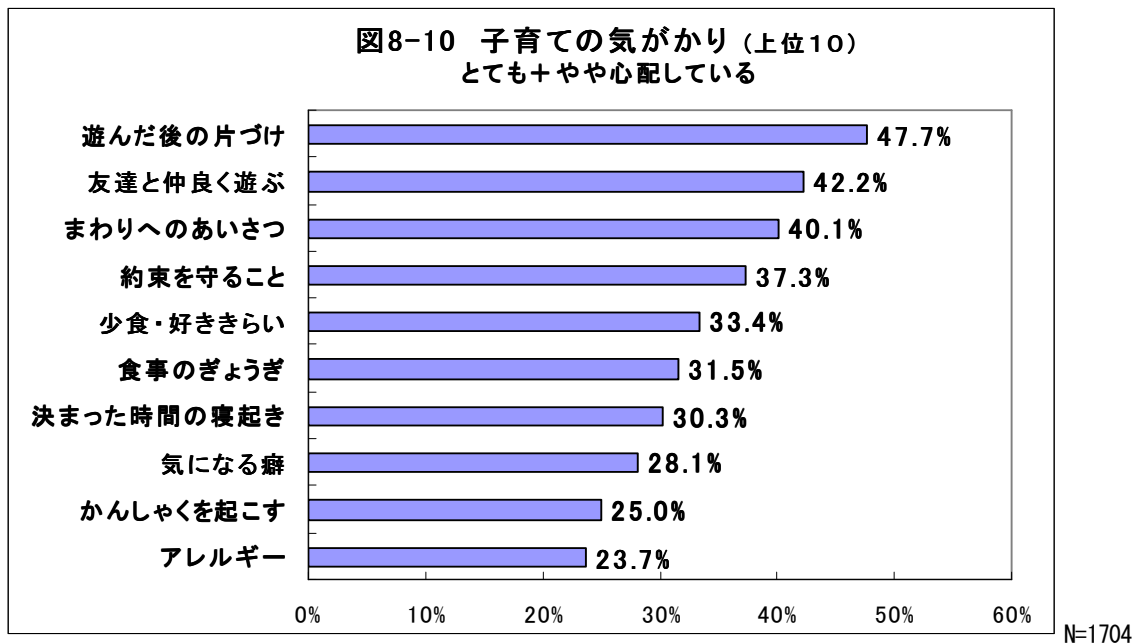


図8-9 子どもの人数



DATA 1 なかなか身につかない片づけの習慣

友達との関わりと食生活も悩みの種



遊んだあとの片づけ、友だち関係は 長く続く気がかりの始まり（図8-10）

園児をもつ母親に毎日の生活習慣の自立やしつけ・教育、子どもの態度や様子に関する気がかり19項目について、「とても心配である」から「ぜんぜん心配していない」までの4段階評定でたずねた。

それらの結果から、「とても心配である」と「やや心配である」を加えた順位では、①「遊んだ後の片づけ」47.7%、②「友だちと仲良く遊ぶ」42.2%、③「まわりへのあいさつ」40.1%が上位3位であった。

「遊んだ後の片づけ」は幼少時から長く続く悩みで、過去の調査^{注2}では、小学生で片づけが自主的にできる子は5人に1人、中学生でも3人に1人で、母親の4割以上が「もう少しやって欲しいこと」として、最上位にあげていた。

同様に、「友だちと仲良く遊ぶ」も、子どもの「気になる性格や態度」・「いじめ」とも関連して、思春期まで続く母親の心配の種がこの時期から始まっていた。

年々遅くなる寝起き時間の心配

3歳児は悩みのピーク（表8-1、表8-2）

子育ての気がかりを年齢と性別でみると、低年齢のときから友だちとの関わりを重要視しており、近年の親子での子育てづきあいへの関心の高さが顕著に表れていた。

食生活の心配は、とくに、3歳や6歳という就園前や就学前の年齢では、給食や集団での食事への気がかりからか高くなる傾向が出ていた。

また、友だちとの関係、性格・態度、生活習慣や自立に関しては、自我が芽生えてまわりとの関わりがむずかしくなる3歳児が、他より有意に高い数値を示していた。性別で比べると、女子は「泣きやまない、気になる癖」、男子は「落ち着きがない、約束を守る、言葉の発達」の心配が有意に多かった。

なお、寝起き時間の気がかりでは、親の仕事や毎日の生活の都合に合わせて、子どもも夜遅くまでビデオやテレビを視聴して起きている「生活時間感覚のズレ」という近年の特徴が調査結果にも表れていた。

表8-1 現在の子育ての気がかり（年齢・性別）

順位	1歳児		2歳児		3歳児	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1	26人	21人	35人	33人	175人	158人
	友達と仲良く遊ぶ		友達と仲良く遊ぶ		遊んだ後の片づけ	
	34.6	42.9	45.7	57.6	50.3	46.8
2	遊んだ後の片づけ		トイレトレーニング		友達と仲良く遊ぶ	
	26.9	42.9	45.7	57.6	49.7	46.2
3	トイレトレーニング		約束を守ること		少食・好ききらい	
	23.1	42.9	40.0	45.5	43.4	39.9
4	あいさつをする		遊んだ後の片づけ		約束を守ること	
	26.9	38.1	25.7	54.5	47.4	34.8
5	気になる癖		あいさつをする		あいさつをする	
	26.9	38.1	37.1	36.4	48.0	33.5
6	アレルギー		気になる癖		食事のぎょうぎ	
	34.6	28.6	37.1	30.3	38.3	34.2
7	決まった時間の寝起き		少食・好ききらい		決まった時間の寝起き	
	26.9	33.3	28.6	36.4	34.3	30.4
8	かんしゃくを起こす		かんしゃくを起こす		トイレトレーニング	
	19.2	42.9	28.6	33.3	37.1	27.2
9	少食・好ききらい		決まった時間の寝起き		かんしゃくを起こす	
	19.2	33.3	17.1	36.4	37.1	27.2
10	食事のぎょうぎ		親の言うことを聞かない		気になる癖	
	23.1	23.8	25.7	24.2	29.7	31.0

(%)

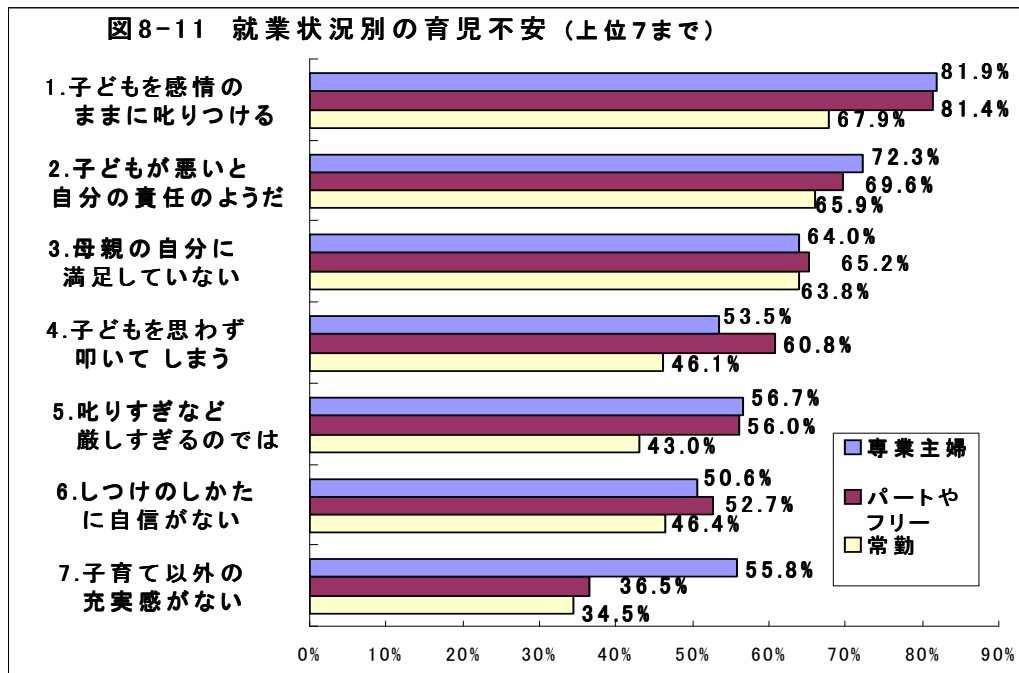
表8-2 現在の子育ての気がかり（年齢・性別）

順位	4歳児		5歳児		6歳児	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1	266人	217人	278人	206人	78人	56人
	遊んだ後の片づけ		遊んだ後の片づけ		遊んだ後の片づけ	
	53.0	54.8	61.9	51.9	47.4	57.1
2	友達と仲良く遊ぶ		あいさつをする		あいさつをする	
	48.9	50.7	45.7	51.9	44.9	53.6
3	あいさつをする		友達と仲良く遊ぶ		友達と仲良く遊ぶ	
	44.0	43.3	41.7	44.2	39.7	42.9
4	約束を守ること		約束を守ること		約束を守ること	
	44.7	40.1	42.1	38.3	43.6	30.4
5	少食・好ききらい		少食・好ききらい		食事のぎょうぎ	
	35.0	37.8	36.0	35.0	38.5	33.9
6	食事のぎょうぎ		食事のぎょうぎ		少食・好ききらい	
	36.8	34.1	37.8	31.1	42.3	28.6
7	決まった時間の寝起き		決まった時間の寝起き		気になる癖	
	33.1	37.8	33.8	34	24.4	46.4
8	気になる癖		気になる癖		決まった時間の寝起き	
	28.6	35.9	24.8	34.5	35.9	26.8
9	かんしゃくを起こす		落ち着きがない		アレルギー	
	28.6	29.0	30.6	23.8	28.2	28.6
10	親の言うことを聞かない		親の言うことを聞かない		親の言うことを聞かない	
	27.8	27.2	24.1	26.2	24.4	32.1

(%)

DATA 2 つい子どもを叱りすぎては反省する

やり場のない気持ちと不安全感



思うようにならない毎日の子育て

ネガティブな言動に自責の念も（図8-11）

「毎日の子育て生活や子どもに関してどのように感じているか」を4段階の評定でたずねた。その結果の「とてもそう思う」と「ややそう思う」を加えて、母親の就業状況別にみたのが図8-11である。

「子どもを感情のままに叱りつけることがある」・「叱りすぎるなど子どもに厳しくしていると思うことがある」・「子どもを思わず叩いてしまうことがある」など『ネガティブな関わり』が上位にあげられていた。

母親は、つい子どもを叱りつけてしまう日ごろの育児を不本意に思い、自分を責めることになる。そのため、近年の児童虐待や育児放棄のマスコミ報道を他人事とは思えず、過剰反応した傾向も回答結果には見られた。

常勤者は専業主婦に比べて、育児や家庭以外の関心事があり、子どもを園の先生や祖父母など他の援助を得ながら行っているためか、全体的に不安感が有意に低い結果であった。

育児不安感が高い専業主婦

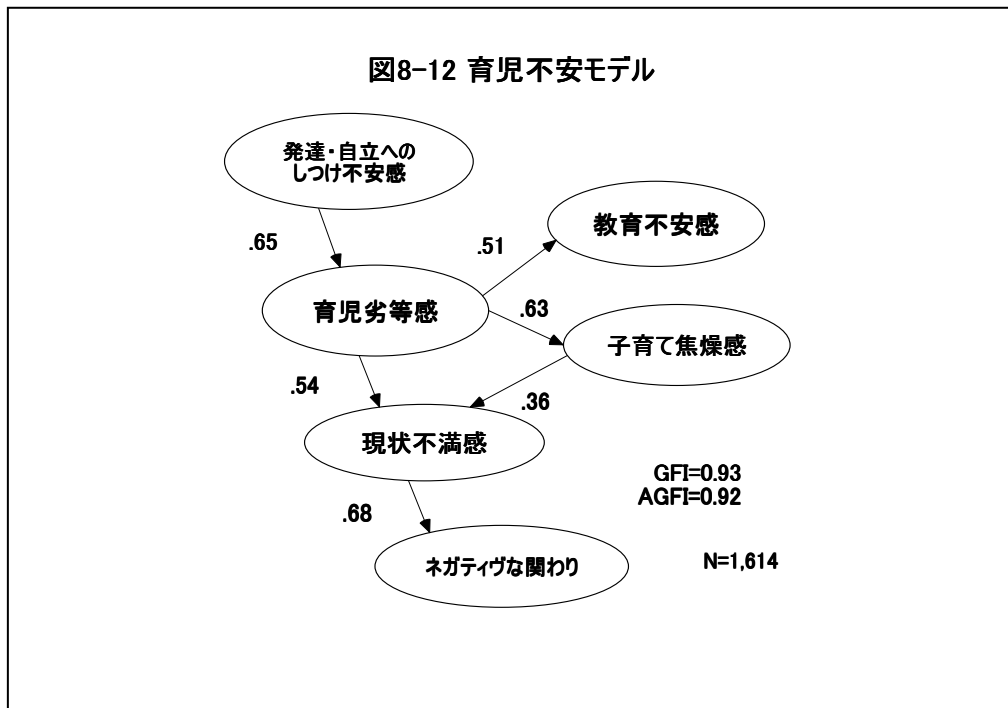
働く母親も子どものしつけは悩み

「子どものしつけに自信がもてない」、「子どもが悪いと自分の責任のように思える」などの『育児劣等感』や「仕事や趣味・サークル、スポーツ、宗教その他、子育て以外の充実感がない」ことも、専業主婦は常勤者に比べて有意に高かった。

DATA 1 で示した「子どもの発達・自立へのしつけ不安感」を、幼稚園児と保育園児の母親で比較した結果では、保育園3・4歳児では園での昼寝の影響か、「決まった時間の寝起き」の心配が高く、その他では、「約束を守ること」を気にかける親が有意に多かった。

とくに、保育園児の母親は、しつけのしかたに自信がなく、子どもがわがまま・かんしゃくをおこすなど性格・態度への対応に悩んでいた。一方、幼稚園児の母親は、親子同士でつきあう時間が長いためか、「友達との関わり」や毎日の「排泄・着衣・手洗い」の心配が有意に高いという結果であった。

DATA 3 しつけ・教育の気がかりから始まり 期待や不安感が複雑にからみ合う



より良いしつけや教育への期待と不安が子どもへも影響 (図 8-12)

現在の子どもの性格や態度、生活面での発達状況や友だちとの関わりなど、子どもに関する『発達・自立へのしつけ不安感』が育児意識の基底にある。

子どものしつけや教育への関心が高いのが現代の母親達の特徴である。園児の母親達が抱く育児不安の中核としては、対人関係と自分自身への『育児劣等感』が位置づけられる。

『育児劣等感』は、他の子と比較して自分が落ち込み、子どもが悪いと自分の責任と思ひこむことや、しつけに自信がもてず、くよくよ気に病むという内容項目から形成される。

劣等感から生じた心的機制としての補償作用は、幼少時期からの習い事や過度な教育期待という子どもに対する『教育不安感』にも表れている。より良い教育をと子どもへの期待が高まるほど、相対的な評価が気がかりとなり、母親としての自尊感情を低下させることにつながるのではなかろうか。

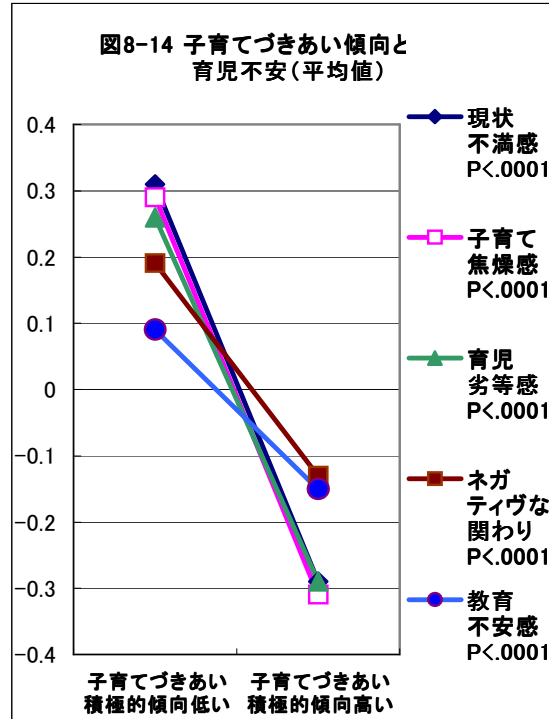
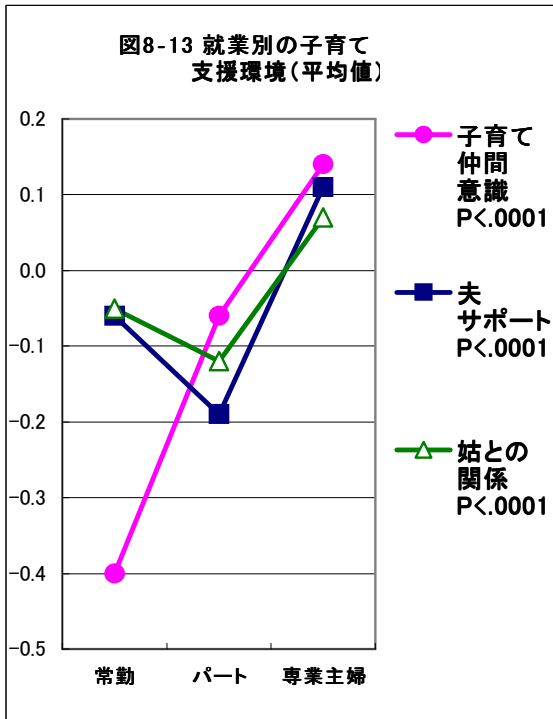
カウンセラーの援助が必要な焦燥感が高い母親への配慮を

これらの諸要因が、「子どもがわずらわしくてイライラする、不安や恐怖感におそわれる、現在の生活がむなしい」などの精神的に脆弱でカウンセリングや臨床的援助が必要な母親の心情を含む『子育て焦燥感』へも影響を与える。さらに、それら両方の要因が、「母親としての自分に満足できない、子どもをもつことでは自分が成長していない」などの『現状不満感』に結びつき、「感情的に叱ったり、叩いたりする」子どもへの『ネガティブな関わり』へと移行する育児不安モデルの要因が抽出された。これらの要因の中では、とくに、『子育て焦燥感』が高い母親へは、まわりの人達からの配慮が必要とされる。

なお、このしつけ・教育に関する育児不安モデルは共分散構造分析により構築された。その妥当性の検定結果は、適合度 GFI の値は 0.93 で、修整適合度 AGFI の値は 0.92 と十分に高いことが明らかになった。

DATA 4 子育てづきあい積極派は育児不安が低い

家庭と仕事のはざまで揺れるパートタイマー



N=1552

N=932

夫のサポートが低いパートタイマー 不安定な立場への理解が必要 (図 8-13)

「近くに子どもをあずけ合える友人やグチを言い合える子育て仲間がいる」・「自分らしさを出せる友人やグループなど集まれる場がある」などの『子育て仲間意識』は、常勤者よりパートタイマー、さらに、地域にいる時間が長い専業主婦のほうが有意に高かった。

また、パートタイムで働く母親は、家庭と仕事のはざまで、さまざまな『夫サポート』を得られていないと感じていた。加えて、『姑との関係』も専業主婦に比べて、困難な状況であるという結果であった。

現状ではパートタイマーの定義づけが一律ではなく、一般労働者に比べて不安定な立場に置かれている。職場や家庭でも、パートで働く母親への一層の理解と個別対応した援助が必要であることを示唆していた。

子育て仲間への親和性が高いおつきあい積極派は育児不安が低い(図 8-14)

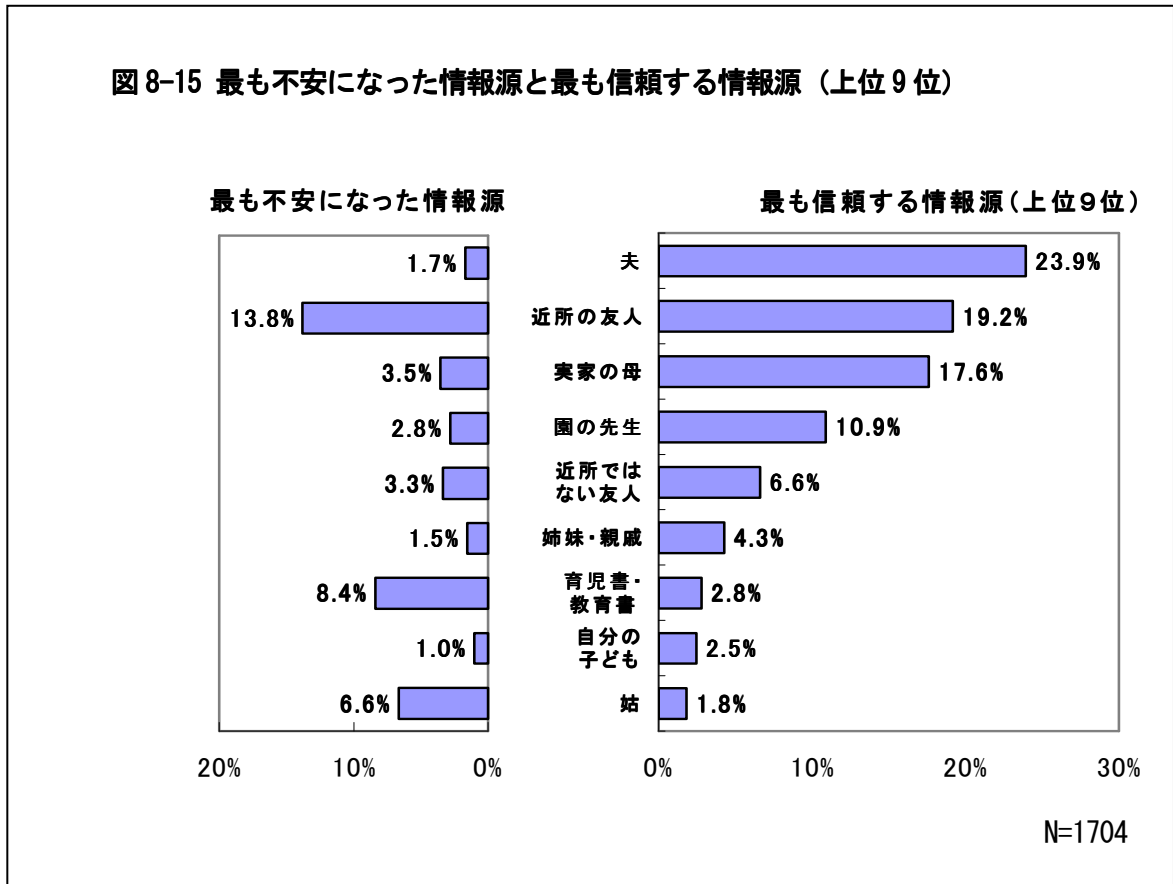
母親の育児不安感を、個々の母親の性格特性や日常の行動傾向から検討した。

まず、同じ年ごろの子どもがいる母親達に親近感をもち、子育てづきあいに積極的かどうかをたずねた。具体的な質問内容は、「話し合いの輪に気軽に参加できるか」・「自分と違う考えの人達の中でもうまくやっっていけるか」・「親子での友だちづきあいを負担に感じるか」などの『子育てづきあい積極的・親和性傾向』6項目である。これらの得点を加算して高得点と低得点の2つのグループに分類した。

それらを育児不安の5つの要因と比較した結果では、子育てづきあいに積極的傾向が高い母親のほうが、どの育児不安感も極めて有意に低い結果であった。

DATA 5 近所の友人からは安心情報と不安情報を得ている きめこまかな個別対応が必要とされる情報支援

図8-15 最も不安になった情報源と最も信頼する情報源（上位9位）



夫、近所の友人、実家の母 園の先生が信頼情報源の上位（図8-15）

母親を困む情報源の中には、毎日の育児の役に立ち、母親を援助する信頼性の高い情報がある一方では、不安感を高める情報もある。図8-15では、最も信頼する情報源上位9位を右に示し、それらが最も不安になった情報源としての順位を左に示した。

その結果では、近所の友人は最も信頼する情報源の第2位であると同時に、最も不安になった情報源の第1位になっていた。

「近所の友人」とは複数の人を想定してはいても、地域の友人から情報不安を感じている母親が最も多いという結果には変わりはない。今後は、子育てサークルや地域ネットワークによる不安感やストレス要因の詳細を考察することが必要と思われる。

ひとり親家庭では実家の母 園の先生が頼りになる相談相手

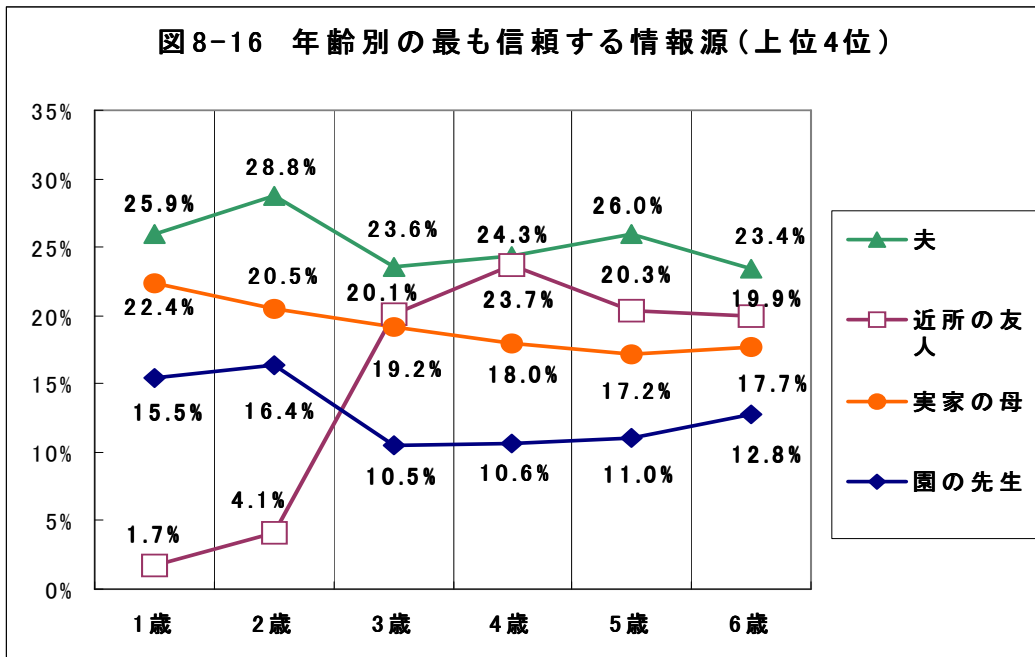
近所の友人や園の先生から高い不安感を得ている母親は、夫を最も信頼する情報源としていた。

育児雑誌から不安情報を得たと感じている母親は実家の母親を頼りにしていた。一方、実家の母親から不安感を得ている母親は、近所ではない友人を最も有意に信頼しており、さらに、最新情報で理論構築するためか、育児・教育書も高い信頼情報源としていた。

なお、母親と子どもだけのひとり親家庭では、実家の母に高い信頼を寄せており、つぎには、近所ではない友人と園の先生であった。諸事情で実母からの手助けが得られないひとり親家庭の母親へは園の先生の配慮が必要であることを示唆していた。

DATA 6 子どもの成長発達の節目で変わる

信頼する情報源と相談相手



N=1641

保育園児の母親は園の先生

幼稚園児の母親は近所の友人（図8-16）

本調査の1・2歳児はすべて保育園児であり、働く母親が多いために「近所の友人」とはつきあいが少なく、低い位置づけであったが、専業主婦や幼稚園児の母親にとっては、「近所の友人」は重要な情報源である。

本調査においても、幼稚園の年少児が含まれる3歳児を見ると、「近所の友人」は2位に上昇し、4歳児では1位の「夫」と僅差となっていた。

「最も信頼する情報源」の上位3位は、幼稚園児の母親の場合は、①夫26.5%、②近所の友人24.6%、③実家の母17.3%で、保育園児の母親では、①夫21.8%、②実家の母20.1%、③園の先生16.9%の順であった。

「実家の母」は、出産後の乳児期や働く母親の頼りの網であるが、2歳児以後は下降するが、就学前情報が必要になる6歳児では、再び、園の先生同様に上昇していた。

親族・専門家は低年齢時の情報源

近所の友人・習い事の先生は高年齢時

複数回答でたずねた「活用情報源」を子どもの年齢の推移で見ると、実家の母・姑・姉妹など『親族』と園の先生・医師や看護婦・保健婦や栄養士などの『専門家』は、1歳児にもっとも多く活用されており、年齢の上昇とともに下降していた。同じ専門家でも、「習い事や教室の先生」は1歳8.2%、3歳23.8%、6歳37.6%と上昇し、「近所の友人」も同様に、1歳59.0%、3歳80.8%、6歳84.6%と年齢とともに上昇していた。「育児雑誌」や「テレビ」は1・2歳がピークであるが、「育児・教育書」は2歳児と就学前の6歳児に再上昇し、「新聞」は高年齢のほうが読む傾向にあった。「インターネット」活用率の平均は4.8%で、1歳8.2%、2歳7.9%と低年齢児の親に活用率が高く、ネットからの育児情報は、常勤者が専業主婦より、専業主婦はパートタイマーより有意に活用していた。

DATA7 さまざまな情報源を使いわけ

情報化時代の母親たち

表8-3 最も信頼する情報源と判断理由(とても重要である)

順位	夫	%(度数)	順位	近所の友人・知人	%(度数)
1	夫が育ったように育てたい	55.1%(34)	1	同じ年頃の子がいてわかりあえる	27.2%(243)
2	わが家らしい子育てをしたい	35.3%(209)	2	身近かで相談しやすいこと	22.5%(270)
3	自分の身内であること	33.7%(119)	3	最新情報が手に入ること	21.9%(48)
4	個人的なことが守られる	26.1%(174)	4	子どものことをよく知っていること	20.8%(213)
5	身近かで相談しやすいこと	26.0%(312)	5	役に立つ具体的なアドバイス	19.1%(149)
順位	実家の母	%(度数)	順位	園の先生	%(度数)
1	自分が育ったように子を育てたい	45.7%(64)	1	専門的な知識があること	20.6%(110)
2	自分の身内であること	34.8%(123)	2	最新情報が手に入ること	16.9%(37)
3	経験や体験内容が豊富である	20.6%(230)	3	正確な情報が手に入ること	13.7%(59)
4	身近かで相談しやすいこと	19.3%(231)	4	役に立つ具体的なアドバイス	12.6%(98)
5	わが家らしい子育てをしたい	18.4%(109)	4	子どものことをよく知っていること	12.6%(129)

情報を信頼できる判断理由

最も重要と思うことは対象で変化(表8-3)

活用情報源の信頼判断理由 13 項目の内容を、どのくらい重要視するのかを4段階評定でたずねた。つぎに、それら個々の内容項目から、とくに、「とても重要である」と選んだ人だけを、単一選択されたもっとも信頼する情報源とクロス集計をした。

「夫」を最も信頼する情報源に選んだ母親は、①夫が育ったように子どもを育てたい、②わが家らしい子育てをしたい、③自分の身内であることを有意に「とても重要である」としていた。「実家の母」は、①自分が育ったように子どもを育てたい、②自分の身内、③経験や体験内容が豊富、④身近で相談しやすいなどが有意に多くあげられていた。

家族や親族からの情報を判断するときには、『ファミリー意識』や『独自性』が重要視されていることが、この結果には表れていた。

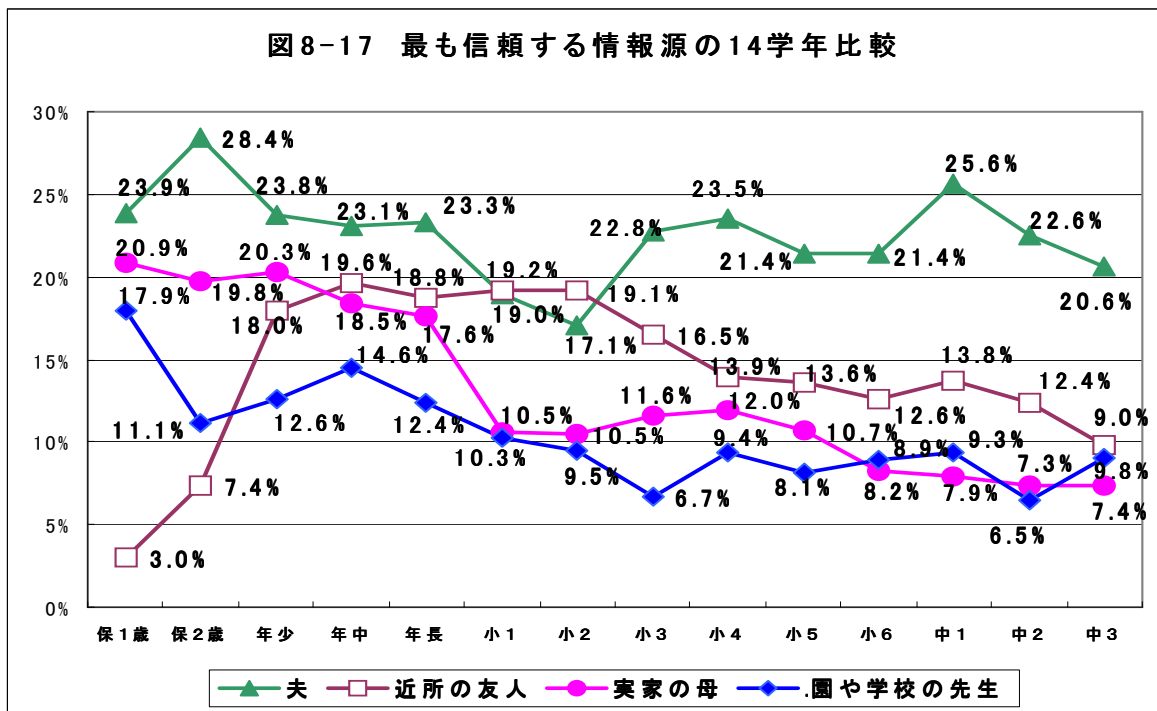
「ファミリー意識」、「独自性」に加えて「専門性」と「親近性」も大事な要素

「近所の友人・知人」を最も信頼する情報源にした母親は、①同じ年ごろの子どもがいてわかりあえる、②身近で相談しやすい、④子どものことをよく知っているなどの『親近性』を大事にしていた。

「園の先生」は、①専門的な知識があること、②最新情報が手に入ること、③正確な情報が手に入ることに『専門性』を最重要と考える母親達が一番の信頼先としてあげていた。以上のことから、しつけ・教育に関する多くの情報に囲まれて暮らす母親達ではあるが、一人ひとりが明確な情報収集意識をもって、まわりの頼りになる人やメディアを、選定していることが明らかになった。

また、育児情報の調査結果を時系列でみると、近年は、とくに「専門性」を重要視する傾向が特徴的であるといえよう。

Column : 最も信頼する情報源の14学年比較



N=1704(保1歳～年長) N=1694(小1・2) N=4475(小3～中3) *年少～年長は保育園3～5歳児も含む

子どもの年齢によって、母親が最も信頼する情報源が変化していく推移を示したのが図8-17である。保育園1歳児から中学3年生の15歳までの母親が最も信頼するしつけ・教育情報源を一つだけ選んだ結果の比較である。

小学校1・2年生のデータは山岡ら(1998)^{注1}から、小学校3年生～中学校3年生までは、山岡ら(1999)^{注2}の調査での同じ質問結果から作成した。全学年を通して、おおむね「夫」が高信頼情報源の上位にあげられていた。

本調査の1・2歳児は保育園児の母親のみで、近所の友人との交流が少ないが、幼稚園児も含む年少児からは、「近所の友人」が2位となり、小学校1・2年生では「夫」を抜いて1位になっていた。核家族だけで都会の子育てをしている母親にとっては、子育てサークルや近所の子育て仲間は大事な準拠集団である。本調査においても専業主婦の活用情報源としては、「近所の友人」が89.3%で1位であった。「園や学校の先生」は、入園・入学時や反抗期など、母親が子どもの精神発達上で、困難感を覚える時期には高信頼情報源として上昇していた。とくに、就学前の働く母親にとっての活用情報源として、「園の先生」は、常勤者89.7%、パートタイマー80.8%で、それぞれの第1位にあげられていた。

全体を通して、就学前や低学年時では、「夫、実母、園の先生、近所の友人」が、個別の母親の就業状況や家族構成に応じて、選択されるという多様なニーズが示されていた。しかし、小学3年生になると、父親のみが上昇して他の情報源が下降していく傾向に、母親は、「父親の出席」を期待していることが明確に表れていた。

注1 「子育て生活基本調査報告書」ベネッセ教育研究所 1998

注2 「子育て生活基本調査報告書Ⅱ」ベネッセ教育研究所 1999